

財団だより

多摩川

1994.9 第63号



モツゴ(コイ科)
クチボソとも言う。下流部の泥底に住む。深いところを好む。



子供たちに投網の打ち方まで教える楽しい水辺の教室(東京都環境保全局主催の「親と子のふれあい環境セミナー」多摩川羽村堰上 H6.7.28撮)

■多摩川現風景■

(19) 水辺の学習会

今年の夏も多摩川の各地で「多摩川教室」や「水辺の学校」が開催されている。水質調査、水辺の生物観察、川の学習講座、水遊び体験など、メニューが多様になっている。

こうした催しは、かつては住民団体が主体となっていたが、この所、国や自治体の河川管理者、環境問題担当のセクションが主催し、公式行事として行なわれるものが増えている。ここ数年、環境学習をテーマに、多摩川のフィールド利用の研究が増えているが、もう一步踏み込んで「正しい川遊び」といった講座などが出てくると、川が活気づいて来るかも知れない。川の危険さや楽しさ、遊び方の節度を含め、昔、子供の川遊びのルールとして継承されてきたノウハウが途切れてしまっている。水生昆虫を見るのは水質を調べるためではなく、釣りの餌として知るのであるという視点を持つと川遊びのノウハウに直結し、やがて毛バリと釣りの文化を知ることとなる。教育ではなく学習の視点とも言えようか。

●関連する財団の助成研究

<学術研究>

- ①多摩川を活用した環境教育の実態と展望
1986年 丸田頼一 (株)環境科学情報センター (No.88)

<一般研究>

- ①児童、生徒に自然環境を考えさせるための水質調査〔多摩川の中流域を中心として〕
1981年 前田 穂 都立教育研究所 (No.11)
- ②環境教育の場としての多摩川の教材化〔多摩川の水源地から中流域について〕
1985年 濁川富雄 都立清瀬高校 (No.41)
- ③多摩川の自然を小学校の理科教材として活用する方法の研究〔稲城市を対象にして〕
1983年 加藤和俊 稲城市立稲城第三小学校 (No.28)
- ④多摩川流域の生物と環境に関する学習の基礎的研究
1983年 栗田敦子 都立教育研究所 (No.26)
- ⑤多摩川流域における地学的素材の教材化に関する基礎的研究
1988年 伊藤久雄 目黒区立第八中学校 (No.55)
- ⑥河川の学習機能に関する研究—多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケーススタディとして—
1991年 並木直美 よこはま川を考える会 (No.73)

※前号表紙右上図の説明文に誤りがありました。

正しくは以下のとおりです。訂正お詫び致します。

カマツカ(コイ科)

中流～下流の流れのゆるやかな砂礫底に住む。

多摩川散歩

■野川さんぽ地図

堀井広子（制作担当アトリエ・ネット）

野川は国分寺に源を発し、国分寺崖線（通称はけ）からの湧水を集めながら小金井、府中、三鷹、調布、狛江、世田谷と流れて多摩川へと注いでいる全長約20キロメートルの一級河川です。水源の1つの「お鷹の道・真姿の池湧水群」は、環境庁の「日本名水百選」の1つに選ばれ、東京にもまだこんな所があったのかと思われるようなせせらぎが木々の間を流れ、訪れる人が絶えません。はげの森と一体になった野川の自然環境は、流域を通じて市民の憩いの場にもなっています。休日には、散策の人、ジョキングの人、草つき、美しいカワセミに魅せられた人々のカメラの列等々。

その野川も20年ほど前までは家庭雑排水で汚れ洗剤の泡のたつ川で暗渠化の陳情も提出されるほ

どでした。しかし、清流を取り戻そうと立ち上がった市民の地道な努力に支えられてきれいな川によみがえりつつあり、現在でも多くの市民や団体が野川の自然環境の保全と景観の保護のために様々な活動を行っています。

昨年、TAMAらいふ21協会の呼びかけにより、多摩地区の4つの河川の地図が市民の手でつくり、多摩地域の広域的な自然環境保全の雰囲気作りの一助になっています。野川でも流域の市民団体が集まって「野川散策マップづくりの会」を組織し、情報を持ち寄り、「野川さんぽ地図」を作りました。この中には、上流から下流まで、川のこと・水のこと・生物（鳥や魚など）のこと・歴史のこと・文化のことなどが写真やイラストなどとともに盛り込んであり、人々の暮しと川が深く結びついていることがわかります。

この地図を持って歩いてみて、自分の好きな野川を見つけて欲しいと思っています。



『野川さんぽ地図』を入手ご希望の方には1部200円でお分けできますのでご連絡下さい。

「野川マップづくりの会」またはアトリエ・ネット

東京都小金井市本町1-12-4-201 Tel 0423-84-8951 Fax 0423-84-8955

私と多摩川



水生昆虫の観察・多摩川，海沢橋付近（'94. 7. 24撮）

東京都奥多摩ビジターセンター 井上 祐子

私は、何故か「川」が好きです。

私が子供の頃を過ごした横浜市には、鶴見川という一級河川が流れていました。その頃はすでに、鶴見川は悪名高き汚れた川になっていましたが、子供の私にとっては、ツクシやノビルをとったり、ままと用の花を摘んだり、犬と散歩をしたりする大切な遊び場でした。台風の後には、土手の上で大きな亀がのそのそと歩いたり、はじめてトックリバチの巣を見たのもこの鶴見川の川原でした。そんな子供時代を過ごしたせいか、いつしか川そのものに対して、一種のノスタルジーみたいなものを感じるようになりました。

今、多摩川の上流域である奥多摩に住み、自然をネタにした仕事をしていると、私と同じように川に愛着を抱いている方が意外と多いことに驚かされます。不思議なもので、人は誰しも水辺に惹かれます。あんなに汚い隅田川でも、夏になれば屋形船が大繁盛しますし、自然になど全く興味のない若者たちにとってすら、港や浜辺はデートスポットとして定番となっています。現在、たくさんの方々、多摩川を含めた自然環境を守ろうと

各地でご活躍されていますが、その方々も多摩川のもつ不思議な力に惹かれ、またその力が、活動の無限の原動力となっているのではないのでしょうか。

実際に、私が自然環境としての多摩川に目を向けるようになったのは、6年ほど前のことです。その当時、私はまだボランティアで、都の職員の方と一緒に、ゴールデンウィークや夏休みを中心に、多摩川の川原や奥多摩の山々のゴミ拾いを行っていました。そこで、ビジター（自然公園の利用者）のマナーの悪さや身勝手さをまのあたりにしました。自然を求めて奥多摩に

訪れる方は、年間200万人とも300万人とも言われていますが、自然とのつき合い方を知らず散らかし放題、騒ぎ放題で帰られる方が、残念ながら非常に多いようです。特に奥多摩は平地が極端に少ないので、キャンプ場やテントサイトのほとんどは、川原に設けられています。そのために、多摩川やその支流が、最も影響を受けることになるのです。川原に放置された空缶や残飯を見る度に、川ファンの私としては、やるせない思いでいっぱいになります。

私は現在、自然解説員という耳慣れない仕事に就き、本職として自然保護に取りくむ立場にあります。仕事から、子供たちに多摩川についての話をすることも少なくありません。次の世代を担う、好奇心旺盛な子供たちに、多摩川の抱える問題や多摩川のもたらす豊かな恵みに直に触れ、何かを感じてもらえればと思うのですが、まだまだ私の力が足りないようです。しかし、これからは子供たちと（もちろん大人たちも）、多摩川とその源である奥多摩の自然を、守り育てて行くためには何をすべきかを、一緒に考えて行きたいと思っています。

甦れ！多摩川

■ 三沢川を歩く

財団法人 三沢川環境浄化財団 客員研究員 山道省三

強烈な夏の日差しの中に、穂をつけはじめた稲が風に波打っている。鳥追いの空砲がひっきりなしに聞こえてくる。多摩ニュータウンの永山地区から一尾根越えた南側の谷戸が三沢川の源流域である。ほんの数100mしか離れていないのだが、この地区は多摩丘陵と谷戸に囲まれた静かな農村地帯である。上黒川農業振興地区。カキ、キウイフルーツ、ブドウ、リンゴ、多摩川ナシの果樹園を主体とし低地には水田が広がる。空砲は熟成期の果物を鳥から守るためのものである。

三沢川はこの西谷（ニシヤト）と呼ばれる地区の山沿いに細い流れを延ばし、源流点はその上に造成された国士館大学の遊水池となっている。幅1m程の、川というより水路は、まだ農業用水の取水堰が各所にあり、また、かんがい用水の落としにもなっている。わずかばかりの湧水を集めた流れは、水質もきれいであり、地下水を汲み上げたかんがい用水が流れ込み小田急線の黒川駅あたりでは渇水期にもかかわらず流れがある。

小田急線と京王線の間あたりから下流は、川崎市と東京都の行政境にあるためか、約3kmが未改修部であり、かつての田園風景が残されている。シノダケやクルミ、コナラ、シラカシなどの樹木と草々に被われた水面が見えにくい。河床は蛇行し、所々に三紀層が露頭して瀬や淵をつくっている。正直言って三沢川の上中流部がこれ程いい川とは思わなかった。この中流部の一部はやがて多

摩ニュータウンとして宅地造成が行われる運命にあるが、ゴルフ場や米軍の施設が広大な面積を占め、民間の宅地が進出しにくいこともあって、交通量の激しい鶴川街道沿線を除いて住宅は少ない。

本格的な河川改修の工事が行われている上流端は、京王線稲城駅近くの武蔵野線鉄橋から300m程上流までである。それに、そこから1km程上流に三沢川分水路（洪水を多摩川の武蔵野線鉄橋上に放流するトンネル水路）があり、その数100m区間が一部完成している。また、京王読売ランド駅近くでは現在、河床の掘削工事が進行していて川底が現在の高さよりさらに2～3m程深くなり、とてつもなく深い水路に変わろうとしている。三沢川はすでにこのあたりからコンクリート三面貼りの都市排水路の様相となり、そのまま多摩川本川の二ヶ領用水上河原堰下まで一気に下っている。

三沢川を歩いている限り、都市下水の流入による悪臭やゴミについてはあまり気にならなかった。むしろ、上・中流部は変化に豊んでいて、いい川との印象が深い。それに、マゴイを中心とした魚影やカルガモの姿が稲城市役所あたりを中心に多いのに驚いた。そして、この川は、きちんとした視点で調査し、将来予想される河川改修を再考すれば素晴らしい川になりうる要素を持っているという事である。現況の保全を含め何とか従来型の改修方式は改められないものだろうか。

案内図



《 “多摩川およびその流域の環境浄化に 》 関する調査・試験研究” 募集

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に307件の研究に対して助成いたしました。

平成7年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」を下記のとおり募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

(1) 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

産業構造の変革により多摩川流域においても従来型の産業が減少し、ハイテク産業が上流域に立地するようになり、自然環境に影響を与えております。

また、住生活においては、中流域で人口の過密化があり、最上流域では過疎化が顕著になっています。これ等都市問題を解決すべく今後の土地利用、都市計画、文化活動等視野の広い観点に立った研究が望まれます。

(2) 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

産業排水は法規制等により減少し、現在は家庭雑排水が汚染の原因の多くを占めているといわれています。

多摩川流域においても河川、地下水の有害金属、発癌性物質、農業汚染、酸性雨等問題化しております。これ等が人間を含む生物にどのように影響を与えるのか、その実態、解決策等の調査、研究を望みます。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

今夏の水不足はほぼ日本全国に深刻な影響を与えております。

雨水による地下水の涵養等が各地で試みられています。

多摩川流域における水循環システムについてあらゆる角度から調査研究をして頂きたいと思っております。

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査・試験研究

建設省は「多自然型川づくり事業」「魚がのぼりやすい川づくり事業」を推進しております。多摩川もモデル河川として親水護岸整備、堰の魚道整備を行っています。

多摩川には年間を通して1600万人もの人々が訪れています。川の自然と人間がいかに共生できるか、環境管理のあり方の研究を含め、課題となっています。

地域住民の視点、研究者の視点で自然環境の保全、回復のあり方についての調査、研究、提言を望みます。

◆公募締切日 平成7年1月17日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。
 〒150東京都渋谷区渋谷1-16-14(渋谷地下鉄ビル内)
 電話(03)3400-9142 (働)とうきゅう環境浄化財団

≡ 寄贈文献の紹介 ≡

● 「ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法」

—— 農に学ぶ都市環境づくり ——

進士五十八・鈴木 誠・一場博幸 編

1994年 (株)学芸出版社 発行

日本全国の田園景観を例に取りあげ、自然と共生し、人とやさしく、ふるさと観が感じられる街づくり、都市環境デザインの手法を豊富な写真・イラストを用いて論じている。

● 「環境資源と情報システム」

武内和彦・恒川篤史 編

1994年 (株)古今書院 発行

国、地方自治体、研究機関の環境データベースを系統的、構造的にとらえ、地域の環境資源の保全・活用について、環境計画、環境管理のあり方を具体的に解説している。

● 「水をめぐるソフトウェア」

秋山紀子 著 1994年 (株)同友館 発行

著者が国内外の山と川、湖沼、湾を現地調査し、その実態を水源、水道、下水道、河川・湖沼の汚染等「水」を題材に自然と人間の関係について平易に論じている。

● まんがが「地球を守ろう」「きれいな水を守ろう」

小倉紀雄 監修 1994年 実業之日本社 発行

小学生男女3人がトイレの水の行先から、水道、水源林、濁水、洪水、大気と雨、水の中の生き物等水に関するあらゆる角度から体験を通して物語風に書かれている。

多摩川「源流の里フェスティバル」に参加して

多摩川流域の35の行政体から構成される「多摩川流域協議会」の主催する「多摩川源流の里フェスティバル」が8月6日～7日に行われた。

当財団も協賛団体として名を連ねている。

フェスティバルは盛り沢山で、山梨県塩山市の一の瀬高原キャンプ場での「源流体験親子ふれあいサマーキャンプ」。過疎のため、生徒がいなくなるので来年は廃校になる塩山市・神金第二小中学校を会場としての「多摩川流域交流会」である。イベントも花盛りで、「特産市場」、「コンサート」、「ヤマメ・マス釣り大会」、「ファミリーウォーク 武田信玄の財宝を探そう!」、「源流に咲く花写真展」、「源流サミット」等々である。そのうちの「源流サミット」について報告したい。

三枝 剛 塩山市長の開会の挨拶に始まり、岩井國臣 河川環境管理財団理事長の「多摩川上下流交流を考えるー水の循環、人の交流」という話題の提供があった。山を守ることで水を守ることであり、市民の声が高まることにより行政も、政治も動きが進む。これからは地域住民のいろいろな立場からの交流（リージョナル コンプレックス）が新しいコミュニケーションを創出するのではないかとの話があった。パネルディスカッションに移り当財団の山道研究員の司会により岩井理事長、三枝市長、守屋武彦 丹波山村長、加藤亀吉 小菅村長、鈴木 蒨 世田谷区都市整備部長がパネリストとなりテーマを「上流の役割・下流の役割」として1時間20分にわたり本音で語り合った。塩山市、丹波山村、小菅村には東京都の水源涵養林があり水源の水を清流として保つた

めに下水道の整備、防災対策を講ずる等上流としての努力を行っている。山林を主とする生業が段々となくなって行き、生活圏が都市部に移って行き、過疎の状態が進んで来ており、学校が廃校になったり、住民の高齢化が進んできている。道路の整備もままならなくなり、山村の山林自体も適切な予伐、間伐が人手不足で無理になってきている。水源涵養林の保全と住民の生業の確保がうまく両立することが望ましいが、源流の住民の善意にだけ下流が甘えていられない事情が伺われた。

川崎市や世田谷区から住民の参加もあり、始めて聞く源流の事情であったようだ。

源流域の人々はなんとかして清流を守りたいと努力している。多摩川の源流域の水質は山梨県のベスト1である。小菅村でも10年がかりで下水道の整備を行い、本年完成をみた。丹波山村では常住人口800人で、シーズンともなると上下水の能力を超える10倍の7,000人から8,000人が殺到する。昭和54年～56年に奥多摩湖にアオコが発生し、鈴木都知事が山梨県知事を訪れ水源の水質保全について協力を要請したことがあった。これからも源流の水を清く保ち、貴重な自然を未来への贈物として持ち続けるためには上下流の意思の疎通が欠かせないものと思われる。

最後に守屋 丹波山村長により「源流からのメッセージ」が朗読された。多摩川に健全な水循環を維持するため上下流がさかんに交流し、理解しあうことを誓った。

芳村重徳

- ・発行日 平成6年9月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL(048)831-8125

